

令和 5 年 6 月 4 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00045

研究課題名（和文）類似性とパターン認識に基づく言語哲学の再構築

研究課題名（英文）Reconstruction of philosophy of language based on similarity and pattern recognition

研究代表者

松阪 陽一（Matsusaka, Youichi）

東京都立大学・人文科学研究科・教授

研究者番号：50244398

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：語の意味の自然主義的な理解を得るため、意味を分析するための手段としての合理的ゲーム理論と進化ゲーム理論を比較・検討した。そのことにより、意味分析の手法として両者は補い合う役割を果たしうることが見いだせたと思う。更に、後期ウィットゲンシュタインの見解を、一種の「集団思考」として位置づけることを試みた。

語の存在論に関しては、音声や綴りのパターンを語の定義的特徴ではなく、人間同士の言葉のやり取りの中で自然に析出されるものとして描くことを試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

伝統的な言語哲学の諸問題とそれらに対する解決の試みは合理主義的な前提に基づくものが多いのに対し、本研究では近年進展の著しい機械学習や統計的学習理論との関連を明示しつつ、言語哲学のとりうる新たな形を示そうと試みた。本研究が目指したのは「人間の自然史としての言語」（ウィットゲンシュタイン）という観点の現代的な描像であり、言語に対する自然主義的アプローチのひとつとして一定の意義を有すると信じる。

研究成果の概要（英文）：To gain a naturalistic understanding of the meaning of words, I conducted a comparative analysis of rational game theory and evolutionary game theory as analytical tools. This investigation revealed that both approaches can serve as complementary methods for metasemantic analysis. Additionally, I endeavored to position the later views of Wittgenstein as a form of "population thinking."

Regarding the ontology of words, I aimed to portray the patterns of sound or spelling exhibited by words not as defining characteristics of words, but rather as naturally arising through human interaction and communication.

研究分野：言語哲学

キーワード：哲学 言語哲学 意味論 語用論

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 伝統的に哲学の目的の一つは、さまざまな概念、例えば「知識」や「存在」、「人格の同一性」、「意味」といった概念に対して、その定義、あるいは必要十分条件を見いだすことにあるとされてきた。古くから有名なものは、知識であることの必要十分条件を《正当化された真なる信念》であることに求める分析であろう。概念はその定義によって与えられるというこの見解は、現代の言語哲学のさまざまな学説に見いだすことができる。例えば、フレーゲとラッセルによる固有名の記述説は、各々の固有名は何らかの記述の省略であることを主張する(例えば「リンカーン」と「奴隷を解放したアメリカ合衆国大統領」)が、これは固有名を記述で定義できるとする点で、固有名の指示に関する定義説の一種と見なすことができる。あるいは、カプランの が指摘するように、哲学においてしばしば、語はその形や綴りと同一視されてきた。これは、語の同一性を特定の形、あるいは文字の連なりとして定義できるとする点で、定義説の一種と見なしうる。

(2) しかし他方、他方近年その進展が著しい機械学習や統計的学習理論では、必要十分条件のような「規則」よりも、むしろデータの類似性に着目したパターンの概念が重要視されている。報告者もまた、 や を通して、類似性に基づくパターン認識の概念を通して伝統的な言語哲学的問題を捉え直す試みを始めていた。

## 2. 研究の目的

本研究では、類似性判断やパターン認識を、たんにその結果を前提するのではなく、そのメカニズムにまで立ち入って理解することで、言語哲学上の諸概念を再構築することを目指した。特に、次の二つを課題とした。

- (1) 類似性やパターン認識の概念を基にして、メタ意味論(Metaseantics)を再構築すること。メタ意味論とは、固有名や自然種名、あるいは動詞等がどのようにしてその意味を獲得するのかを扱う。意味論が自然言語に関する科学となるために、メタ意味論は非常に重要な分野のはずであるが、現代の形式意味論では、これらの語がどのような意味をもつのかはしばしばたんに自明視されており、その意味を公理の形で書き下すことで満足されている。本研究では、こうした現状を変える努力を始めた。
- (2) パターン認識の概念に基づいて、語の存在論を再構築すること。語の同一性に音や綴りといった特徴が関与することは一方で自明視されていながら、それがどのように関与するのかについてはかなりの混乱が見受けられる。本研究では、カプランの で示された洞察も生かしながら、綴りや音が適切な役割を果たすような語の存在論の構築を目指した。

## 3. 研究の方法

語がそもそもなぜ意味を持ち得るのかの考察としては合理的意図に訴えるグライスの が古典的であり、本研究でもこれをひとつの手がかりとした。その際報告者が着目したのは、David Lewis の による合理的意図に基づくコミュニケーションのゲーム論的分析である。ルイスが用いているのは伝統的な合理的主体によるゲーム理論であるが、本研究が目指す自然主義的な言語の理解にとっては、合理的ゲーム理論はその適応範囲が限定されるという難点もある。そこで、Skyrms の で研究されているような、必ずしも合理的とは言えない動物のコミュニケーションの分析にも適用できる進化ゲーム理論の手法も取り入れ、それを合理的意図に基づく意味の分析と比較・対照させるという手法をとった。

また、語の存在論に関しては、音声や綴りのパターンを語の定義的特徴ではなく、人間同士の言葉のやり取りの中で自然に析出されるものとして描くため、ここでもやはり動物進化の研究を介して、そこから語の存在論を捉え直すことを試みた。その際報告者が着目したのは、Elliott Sober が で提出している「自然状態モデル」と「集団モデル」の区別であり、語の音声や綴りが示す一定のパターンを、語が本来もつべき「自然状態」としてではなく、不可避免的に生じる多様性と揺らぎが一種の自然選択と人為的選択により刈り込まれた姿として見ることを試みた。

## 4. 研究成果

語の意味に関して、「意味と選択」において選択(selection)という概念から、合理的なゲーム理論と進化ゲーム理論の両者に共通するプロセスを抽出することを試みた。この論文での主要な論点は、選択の過程が両方のタイプでのゲームで働いていると見ることができるといえるものである。進化ゲームの場合には、親の世代での戦略の成功の度合いにより自然選択が起こり、結果として子の世代での戦略の分布を因果的に決定するのに対し、Lewis 的な合理的ゲームでは、合理的熟慮の過程で、最もよいと主体の信じる戦略が他の戦略を排して選ばれるという形で選

扱が遂行される。本論の観点の帰結として、グライスの説に対してしばしば指摘される「意図の無限後退」の問題に関する新たな主張をなした。

「進化と安定性 後期ウィトゲンシュタインの言語観」では、後期ウィトゲンシュタインの主要な論点を、生物学の哲学で提出された「集団思考 population thinking」と同種の思考傾向として捉えることを試みた。その際、ダメットによるウィトゲンシュタインの数学の哲学に対する批判を題材にとり、ウィトゲンシュタインの主要な論点を、数学的对象の实在性そのものに関わるというより、むしろわれわれの数学的活動がどのようにして形成されるのかについてのあ種の描像---プラトニズム、直観主義---の批判として理解した。

語の存在論に関しては、Kaplan の で提出されている、語の発音や綴りがどれほど標準的なものから逸脱しているようとも、それはその語の発話でありうるという立場を擁護しつつも、語の発音や綴りのパターンが言語においてもつ重要性の位置を明らかにしようとした。その際、語の存在論を進化する生物との類比において考えるという Kaplan の立場を、Kaplan 以上に掘り下げを試みている。この考察はスペインのパレンシア大学の The Valencia Colloquium in Philosophy での招待講演で発表し、近いうちに論文としても出版することを意図している。

#### 引用文献

David Kaplan, "Words", *Proceedings of the Aristotelian Society*, Supplementary Volumes, Vol. 64 (1990), pp. 93-119.

Youichi Matsusaka, "Reference and Pattern Recognition", Setsuya Kurahashi, Yuiko Ohta, Sachiyo Arai, Ken Satoh and Daisuke Bekki (eds.), *New Frontiers in Artificial Intelligence*, JSAI-isAI 2016 Workshops, Revised Selected Papers, 62-73, 2017.

松阪陽一、「規則とパターン：後期ウィトゲンシュタインの洞察」、『科学哲学』50, 85-106頁、2017.

H. P. Grice, "Meaning", *The Philosophical Review*, Vol. 66, No. 3. pp. 377-388. 1957.

David Lewis, *Convention: A Philosophical Study*. Harvard University Press. 1969.

Brian Skyrms, *Signals: Evolution, Learning, and Information*. Oxford University Press. 2010.

Elliott Sober, "Evolution, population thinking, and essentialism", *Philosophy of Science* 47 (3), pp. 350-383, 1980.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 松阪陽一	4. 巻 49
2. 論文標題 意味と選択	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 哲学論叢	6. 最初と最後の頁 12-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松阪陽一	4. 巻 1185
2. 論文標題 進化と安定性 後期ウィトゲンシュタインの言語観	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 89-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Youichi Matsusaka
2. 発表標題 Further Words on Words: A Naturalistic Approach to the Ontology of Linguistic Entities
3. 学会等名 The Valencia Colloquium in Philosophy at the University of Valencia, Spain (招待講演)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------